

唯識心分説の發達過程

——四分義の一部として——

富貴原章信

一

前の第十四卷、第三號の拙稿、「唯識二諦説の研究」の中に於て、不備の點あるを發見したので、左の如く訂正したいと思ふ。即ちその第一は八十七頁の圖表である。これは實は、慧遠の大乘義章卷一の、二諦義兩門分別の中で、その歷法分別のところを表にこしらへたものであるが、併しよく考ふれば、これは既に記されたことを、再び繰返して表に示したことになるから、蛇足に過ぎないとも考へられる。それで今はこれを省略したいと思ふ。詳しくは大乘義章を参照されたい。次に百一頁の三種勝義と四種勝義との相攝に就て、脫落がある。今これを補へば、その義勝義は、その體が眞如であるから、第四眞に攝まる。次に得勝義は、その體が涅槃であるから、第三眞に攝まる。若し四諦を説いて、得勝義とすれば、第二眞に攝まる。次に行勝義に就て云へば、行正義はその體が無漏の聖道であるから、第二眞に攝まる。若しその事に隨へば、第一の眞に攝まるのである。又次に百一頁の四種二諦と三性との相攝に就いて云へば、第一俗は、常無常門、漏無漏門、何れに於

ても遍計所執性に屬する。第二俗、即ち第一眞は、常無常門に於ては依地起性、漏無漏門に於ては依地起性と圓成實性とに攝せられ、第三俗、即ち第二眞は、常無常門に於ては依他起性、漏無漏門に於ては圓成實性に攝せられ、第四俗、即ち第三眞は、常無常門に於ては依他起性、漏無漏門に於ては圓成實性に攝せられ、第四眞は常無常門、漏無漏門、何れに於ても圓成實性に攝せられるのである。凡そ今私が氣付いたところの脱落を訂正すれば以上の如くである。或はこれ以外にも、思はぬ誤謬を犯してゐるかも知計り難い。大方の批正を希ふ所以である。

さて眞の現實と云ふべきものは、何れに見出さるべきであらうか。具體的な現實は、單なる形式でもなく、また形式のない内容でもない。具體的な現實の、云はゞ立體的な總體は、形式と内容との統一的な全體でなくてはならない。我々の認識は無限に可能なものである。即ち分別することは限りなく豫想されるのであるが、併しかゝる無限の分別も、それは單なる内容であつて、何等の形式もなく、又單なる形式であつて、何等の内容もないと云ふ如きものではない。具體的な分別は、その形式と内容との組織的な全體でなくてはならない。ではかゝる具體的な分別の、體系とも云ふべきものは、如何なるものであらうか。固より茲に分別するとは、了別することに外ならないが、凡そかゝる了別一般が成立する爲には、了別されるものと、了別するものとがなければならぬ。了別するものは、了別されるものに於て、了別作用を生ずるのである。固より了別作用とは、了別

するもの、言へ換へれば能縁者の行相に外ならないが、併しこの行相は、つねに所縁と平行的に考へられるやうに、そこに了別されるものを措定するのである。了別されるもの、即ち所縁は、嚴密に考ふれば、了別するものに對して、超越的なものと内在的なものと、この二に區別されて、謂ゆる疎所縁と親所縁となるのであるが、併しそれは兎に角、了別するもの、即ち了別者に對して、了別されるもの、即ち所縁がなければならない。

ではかゝる了別されるもの、即ち被了別者とは、如何なるものであらうか。云ふ迄もなく被了別者とは、所縁を意味するのであるが、併しこの所縁には、親所縁と疎所縁との二があつて、夫々相分と本質となるであらう。而して此の中又相分は、影像とも云はれる。本質は能縁者に對する場合、一般に超越的であるに對し、影像は内在的でなくてはならない。云ふ迄もなく影像は、縁するものゝ能縁面に寫し出された像を云ふのである。前に記したやうに有部、大衆部等に於て、かくの如き影像は認められてゐたのであるが、併しそれは瑜伽唯識に於けるやうに、寧ろ所縁としてゐはなく、却つて行相として認められてゐた。小乗部派では一般に、影像は行相を意味するのである。無論、唯識說に於て影像は、見分に對する相分であり、能取に對する所取であるが、併し小乗に於てかゝる影像を、相分と名けてゐたか、どうか、それは更に考ふべきであると思ふ。慈恩は唯識疏に於て、小乗の影像を説明するのに、卒爾に唯識說の相分なる語を用ひてゐるが、併し將して小乗に

於て、相分なる語が用ひられてゐたかどうか、行相に就て光記寶疏を見るも、それは影像であるとして云つてはゐるが、併し相分であると云つてはゐないし、又西明も、小乗に於てかの名(相分)を説くに非ずと云ひ、又慈恩も、他の場所^(四)に於ては、小乗では相分の名ありと許すには非ずとも云つてゐるから、やはり小乗では、假令相分に相當する影像はあつたにしても、併し相分とは云つてゐなかつたとせねばならない。而して相分即ち影像は、前に記したやうに、小乗、或は陳那、或は難陀等は行相とするに對し、護法はこれを所縁とする。相分を所縁とすれば、從つて見分が行相となるのであるが、併しかゝる場合、相分は所縁の相貌差別であつて、更に自體分に對するときは、體ではなく用であるから、所縁の作用、又は知らるゝ作用となるであらう。固より知られる作用とは、知られるものが、知るものゝ能縁面に寫し出される場合、初めて生ずるものであるが、併しそれを知られる作用と云へば、寧ろ知られるものと云ふより、却つて能縁化されてゐるとも考へられる。つまり相分とは、所縁の作用、知らるゝ作用を云ふのである。

(一) 三本四四右

(二) 光記卷四(大正四一、八三)、寶疏(大正四一、五三四)

(三) 善珠、分量決、大小二宗行相不同門引

(四) 三本四四左四

(五) 分量決初

(六)四分義私記上初右

(七)二卷抄上

では了別されるもの、即ち相分に對して、了別するものは如何なるものであらうか。固より了別するものは、了別することを内に含み、而して了別されるものを縁じ、分別するのであるが、併しかゝる場合、その了別することを見分と云ふ。^(八)唯識論に、此の了別の用は見分に攝めらると云ふはこれを意味するものであらう。故にかくの如く考ふれば、見分の見は單に見ることではない。^(九)善珠も云つてゐるやうに、見は見照の意味である。見分は了別されるものを見照するのである。而して此の見分は、唯識説では行相であつて、所縁の相分を縁するのであるが、併し小乗では影像、即ち相分が行相とせられ、従つて唯識説の見分は體事とされる。^(十)體事と云へば、識體の事相であり、嚴密に考ふれば、それは識體である限りに於て、唯識説の見分及び證自證分をも含む自體分とも考へられないでもないが、併し又それは識體そのものではなく、識體の事相であり、又唯識説に於ても見分と自體分とは非即非離とされる點などより考ふれば、やはり唯識説の見分を、小乗の體事と見て差支はない。併し小乗に於て見分なる語が用ひられてゐなかつたことは、又相分に同じい。^(十二)而してこの見分は、了別すること、^(十三)即ち能縁の作用であり、^(十四)又はものを知る作用であるが、併しそれは了別するものを離れて、別にあるのではない。無論、了別するものがあるにしても、併し了別され

るものがなければ、了別すること、即ち能縁の作用、更に言ひ換れば、見分は生じないのであるが、併し了別されるものにしても、現にそれが了別されてゐると云へば、そこには既に了別されてゐることゝして、能縁者の内面に含まれてゐる譯であるから、つまり了別すること、即ち見分は、了別するものを離れて、別にあり得ないのである。

(八) 卷二、二六右

(九) 分量決初

(十) 唯識論卷二、二七右、又唯識疏三本四〇左八云、大乘見分收當小乘事攝文

(十一) 唯識論卷二、二八右

(十二) 太賢、學記卷三(中續八〇)云、彼宗雖不立見相名、將大乘名會彼說也文

(十三) 松室私記上、百法問答抄卷二、覺夢抄卷上

(十四) 二卷抄上

では了別するものとは如何なるものであらうか。凡そ了別すること、即ち了別一般が成り立つ爲には、了別するものと、了別されるものがなくてはならない。能縁者、即ち了別するものが、了別されるもの、即ち所縁を了別することに於て、初めて了別一般は成り立つのである。唯識論に、異

(十五)

熟識い自の所縁に於て了別の用あるなりと云ふは、これを表すものであらう。而してこの了別するもの、即ち能縁者とは、識自體分に外ならない。自體分は又自證分とも云はれるが、而かも此の自證分は、相分や見分が識作用であるに對し、識體を表すのである。作用は體性を離れて別にあるの

ではない。識自體は識作用の根據である。故に又唯識論には、相と見とは俱に自證に依て起ると論じてゐる。而してこの識作用の所依となる自證分は、かくて所依となることに於て、能縁の見分を縁じてゐる譯であつて、従つてこれは心自縁の説となるであらう。心自縁の説は、前にも記したやうに、唯に唯識のみではなく、又小乗でも大衆部等に於て認められた説である。併し假令認められてゐたにしても、唯識説の如く、相分見分と自證分との關係に於て、認められてゐたかどうか、思ふに自證分が明かに定立されたと云ふのは、既に唯識説に於ても陳那以後のことであるから、従つて小乗にも心自縁の説があつたにしても、併しそれにも關らず、自證分まで定立されてゐたとは云へない。而してこの自證分、即ち了別者は、相分見分の所依であると共に、また見分を縁じ、見分を知るのである。^(十八)見分は相分に對する場合は能縁ではあるが、自證分に對するときは所縁である。而して又自證分は現量的直覺的なものとされる。然るに之に對して見分は、現比非の三量に通ずるのである。^(十九)見分は能縁の作用であるから、又逆に自證分を縁してもよいのであるが、併し見分が三量に通ずる點より考ふれば、現量的な自證分を縁することは出来ない。かくて自證分のほかに、自證分を縁するものが追究されるのである。

(十五) 卷二、二六右

(十六) 卷一、二右

(十七) 松室私記上初、百法問答抄卷二、覺夢抄上

(十八) 二卷抄上

(十九) 唯識論卷二、二八右

では自證分を緣するものとは如何なるものであらうか。自證分を緣するもの、それは現量的なものでなくてはならない。自證分を直觀的に緣する意味に於て、これを證自證分と云ふ。固より證自證分は自證分と非即非離(二十)であつて、その體より云へば、自證分に即するものであるが、併しその用より考ふれば、緣することゝ緣せられることゝは別であつて、明かに自證分と同じではない。而して證自證分は唯識說に於ても、餘程後期に於て定立せられ、護法、親光等に至つて初めて認められたものであるから、無論小乘に於て認められたと考へられない。又證自證分は自證分を緣するものであるが而もそれは自證分に依て緣せられる。自證分と證自證分とは互に他を緣するのである。故にかく考ふれば、第五分を立てる要はないであらう。何故なら第五分の作用は、第三分、即ち自證分に依てなされるからである。(廿一)以上に於て凡そ四分が如何なるものであるか、明かにされたであらう。併し四分は唯識說に於て、歴史的に、初めから立てられてゐたのではない。古來、安難陳護、一二三四と云はれるやうに、謂ゆる四分説を生ずる迄には、様々の説が立てられてゐたのである。我々は次にそれを考へて見たいと思ふ。

(二十) 唯識論卷二、二八左

(廿一) 唯識疏三本五三右

唯識三十頌の第十七頌に、

是の諸の識い轉變して

分別たり所分別たり

とある。これに就て唯識論^(一)には、是の諸の識とは、心王と心所とである。而して此の心々所は、

轉變して見分と相分とに似るのであるが、而かもかゝる場合、變せられた見分を分別とし、又同じ

く變せられた相分を所分別と名けると論じてゐる。唯識疏に依ると、これは安慧と護法との解釋を

合説したものであると云つて、夫々二論師の異つた解釋を擧げてゐる。先づ安慧の解より考ふれば

依他の識體は變現して、所執の見相二分に似る。それ故に變せられた相分見分は、總無であるが、

併しその各々が分別所分別であると云ふのである。又唯識論の第一卷には、識體轉じて二分に似る

とある。唯識疏^(五)には之を安慧に依つて釋し、諸識の自體、即ち自證分が轉じて、相見二分に似る。

併しこの相見二分は無體であり、所執である。無が有に似る。變せられた無なる所執の相見二分が

有なる依他の自體分に似ることであると述べてゐるが、思ふにこれは、前の安慧の解釋と意味する

ところは變らない。安慧の解に依れば、變ずる識自體分は有であり、依他のものであるが、併し變

せられた相分見分は無であり、所執のものである。^(六)自體分たるものが、見相かほにて現じ、其の姿

はかはるのである。^(七)それで又唯識論の第八卷には、安慧の解を擧げて、三界の心及び心所い……各體は一なりと雖も、二に似て生ぜり。謂く見相分ぞ。即ち能所取なり。かくの如き二分は、情には有て理には無し。この相を説て遍計所執と爲せり。二が所依の體は實に縁に託して生ず。此の性の無に非るを、依他起と名くと論じてゐる。故に以上の如く考ふれば、前の第十七頌に於て、是諸識と云ふその識は、心々所の識自體分であつて、依他の有である。而して分別所分別とは、夫々所變の見分相分であつて、所執の無であると解釋されるであらう。

(一) 卷七、十九右

(二) 光胤記第十八帖(大正六六、八一)云、讀師云、自體分ノ轉テ二分ニ似ルト云似ノ訓ヲハノルト讀ムヘシ云々

(三) 七末二右八已下

(四) 卷一、二左一

(五) 一本五九右四

(六) 義演云、若安慧言變現者、即自體分變現、起遍計所執見相二分文

(七) 光胤記第十八帖(大正六六、八一)

(八) 卷八、二八左

(九)

次に頌文を護法の釋より考ふれば、依他の識體が改轉して、別に見相二分となる。それ故に見相二分も亦依他であるが、併し此の見分はよくその相分を取つて、様々の妄分別を起すのである。從つてかゝる場合、此の見分の能縁の作用を分別と云ひ、又その相分が妄分別されて、所執の相分に

似るを所分別とすると云ふのである。又唯識論の第一卷には、識體轉似二分とある。唯識疏には之^(十)を護法に依つて釋し、諸識の自體、即ち自證分が轉じて、相見二分を生ずる。而してかゝる二分は依他の有である。二分は決して無ではない。有が無に似る。此の見相二分に於て、執するところの所執の二取が無であると述べてゐるが、思ふにこれは、前の護法の解釋と意味内容は同じであらう。^(十一)護法の釋に依れば、能變の識自體分も亦所變の相分見分も、共に有であり依他である。^(十二)一體なる自體分が、二分のすがたに似て現するのである。^(十三)それ故に又唯識論の第八卷には、護法の釋を擧げて、^(十四)一切の心及び心所の……變せる所の二分も、緣より生ずる故に亦依他起なり。遍計と云ふは、これに依て、妄て定めて實に、有なり無なり一なり異なり俱なり不俱なり等と執する、此の二を方に遍計所執と名くと論じてゐる。故にかくの如く考ふれば、前の第十七頌に於て、是諸識と云ふ當の識は、有なる依他の識自體分であつて、これは護法の釋も亦安慧の解と變らないのであるが、併し分別所分別は、護法に於て直ちに相見二分ではなく、能緣の見分が所緣の相分に於て起すところの妄分別と、而してその場合に生ずる分別されたものを表すのである。明かに此の解釋は安慧と同じではないであらう。

(九) 唯識疏七末二左五已下

(十) 一本五一左

(十一) 義演云、若護法言變現者、即自體分變現、起依他見相二分文

(十二) 光胤記第一(大正六六、六〇一)

(十三) 卷八、二八左

(十四) 前の安慧のときには、三界と云ひ、而して茲には一切とある。思ふにこれは、安慧は見相二分が果位にはないとし、護法は因位、果位に通ずる(唯識疏七末五右云、安慧說餘非佛、護法皆通文)と云ふ意味に依るであらう。護法、殊に玄奘の深意趣を、茲にも窺ふことが出来ると思ふ。

(十五)

又次に誰識論には、是諸識轉變、分別所分別の頌文を釋して、或は轉變とは、謂く諸の内識轉じて、我法の外境の相に似て現する。此の能轉變を即分別と名く。虛妄分別を以て自性となすが故に。謂く即三界の心と及び心所と。此の所執の境を所分別と名く。即ち妄執するところの實の我法の性そと論じてゐる。これは唯識疏に依れば、難陀の義とせられる。(十六) 内識見分が依他の相分を轉じ、外境に似る相を現する。それ故に外境とは、所變の相分に於て、妄つて實に我なり法なりと執せられたもので、能取所取を意味し、而してこれが所分別であると云ふのである。又唯識論の第一卷には、内識轉じて外境に似るとある。(十七) 唯識疏には之を難陀親勝の説であると云つて、内識見分は變爲して相分となる。而して此の見分相分は依他ではあるが、併しそれが妄情に執せられて、外境の相に似て現すると述べてゐるが、思ふにこれは前の難陀の解釋と意味するところは變らない。難陀の義に依れば、能變の見分も亦所變の相分も、依他であり有であるが、併しその依他の相分は

實は外境の所取能取の相に似て現するから、従つて所執であり、無である。^(十九)即ち依他の相分をもの

立てずして、所執を取るものであるが、但しうらには相分を立るのである。^(二十)故にまた唯識論の第十卷

には、難陀の説を擧げて、相分等のごときは識に依て變現せられたり。識性の依他の中に實なるが

如きにあらず。爾らずむば唯識の理成せざるべし。識と内境と俱に實有なりと許しぬるが故にと論

じてゐる。故に以上の如く考ふれば、頌文の是諸識と云ふその識は、依他の見分であり、而してそ

れが依他である點に於て、安慧、護法に變らないのであるが、併し識自體分ではなく、内識見分と

する點に於て同じではない。又分別所分別に就ては、難陀に於ては、内識見分が相分に轉變するこ

と、そのことが同時に妄分別を意味してゐるから、その能轉變を分別とし、かくして轉變されたも

のを所分別とするのである。明かに此の説は安慧、護法の解釋と同じではないであらう。

(十五) 卷七、十九左三

(十六) 七末五右六已下

(十七) 卷一、二左三

(十八) 一本六三右

(十九) 小島私記三本二三左

(二十) 光胤記第十八(大正六六、八一二)

(廿一) 卒爾に此の論文を見れば、相分は實ではない如くであるが、併しこれは慈恩に依れば、相分は識性の用であつて、根本の識性が實である如くではないと云ふ意味である(唯識疏十末八〇右。故にかく考ふれば、相分が實ではないと云ふのは

直ちに我法乃至兎角等の無であると云ふ意味ではない。このことは、次下に識と内境と實有であると云ふに依つても解る。併しこの論文には、更に詳しくせねばならぬ問題が存在するが、それは更に後に委しく考へて見たいと思ふ。

凡そ以上に於て、頌文に對する三論師の異つた解釋は示されたであらう。ではその何れが頌文の

正意であらうか。^(廿二)唯識疏に依ると、唯識論の組織を説明して、論に諸論師の説を列舉する場合、初

めに有義と云はず、後に有義とあるならば、初めの説が勝れてゐると云つてゐるが、これは例へば

論の第三卷に、阿羅漢位捨の阿羅漢を釋する三師の説の如き、これに相當するであらう。又は初に

も後にも有義と云ふ場合には、多くは後説が正義であると云ふ。思ふにこれは、論の第四卷に、依

彼轉縁彼の依字を釋する二説の如き、これに當嵌るのである。又は初めにも後にも皆有義と云つて

而して理證と教證と等しいときには、取捨任情であると云つてゐるが、これは例へば、論の第六卷

に、無貪等三根(善心所)の無癡を釋する二説の如き、これに相當するであらう。又は前には但解す

るのみであり、後には理に依て徵するときには、これは一師に依つて假りに諸説を舉げた迄であ

ると云ふ。思ふにこれは論の第五卷に、及餘觸等俱を釋する下に五受俱を解する三説の如き、これ

に相當するであらう。故に慈恩は、唯識論に、假令有義とあるにしても、併しそれは必ずしも一師

が假りに説いて、多くの有義を舉げたものではないと云つてゐるから、従つて茲に於ても、成唯識

論が如何なる釋譯であるかと云ふ消息が知られる譯であるが、思ふに慈恩は、玉華宮の肅誠殿——

唯識論の譯場——に參入し、親しく糅論を三藏より稟承した人であるから、燈主も云つてゐるやう

(廿八)

に、豈知らずして妄りに此の斷をなさむやと云へるであらう。而して更に慈恩は、第一卷の變謂識

體轉似二分の論文と、或復内識轉似外境の論文とに就て、これは何れが勝れてゐるのでもないから

取捨任情であると云つてゐる。して見ると、前の論文は安慧、護法を合説したもの、後の論文は難

陀の説を述べたものであるから、つまり此の三論師の説は、何れが殊に勝れてゐるとも云へないの

である。然るに三論師のかゝる説は、その儘に、第七卷の第十七頌、即ち諸識轉變の頌文の解釋

に當嵌る譯であるから、従つて第十七頌に對する三論師の三様の解釋も亦、その中で何れが特に勝

れてゐるとも云へない。即ち世親の是諸識轉變の一頌に就ては、相等しい價值に於て、三様の解釋

(三十)

が施され得るのである。實に萬象を一字に含み、千訓を一言に備へてゐると云はねばならない。

(廿二) 一本六四右

(廿三) 卷三、十一右

(廿四) 卷四、十三右

(廿五) 卷六、四右

(廿六) 卷五、一右

(廿七) 最近の學者の一説に依れば、成唯識論は一般に糅譯と稱せらるゝが、然し護法の説のみ正義となしてゐるから、論全體を護法の著と見做しても差支ないであらう(宇井博士、印度哲學史、四三八頁)とある。

(廿八) 義燈一末三五左

(廿九) 疏一本六四左

(三十) 樞要上本五右

古來相傳の釋に依れば、この是諸識轉變、分別所分別の頌文は、三分說に依つて解釋される。卽ち^(卅一)是諸識と云ふは自體分、分別は見分、所分別は相分とされるのである。故にかの眞興^(卅二)はこの頌文に點じて、

是の諸の識い轉變して

分別たり所分別たり

此に由て彼れは皆無し

故に一切唯識のみなり

と訓むのである。然るに最近の學者による梵頌^(卅三)の和譯には、

識の轉變が此の分別なり

此に由て分別される彼は有らず

此に由て一切は唯識のものなり

とある。今この和譯によれば、識轉變と分別とは同一のものであつて、前者は自體分、後者は見分と分けられる如きものではない。固より梵文第十七頌は、玄奘三藏の如く譯されるが、併しブサ

ン氏も佛譯成唯識論に於て、西藏譯に従ひ、寧ろ識轉變と分別と分けて云はない方が、却つて原文

に忠實であるとも云つてゐるから、次に更に別な和譯を舉ぐれば、
(卅五)

此の識の轉變は分別なり

彼〔分別〕によつて分別せらるゝ〔物〕は

彼れ〔何れも〕有るにあらず

故に此の一切は唯記識のものなり

思ふにかくの如く譯すれば、三十頌の異譯とされる眞諦譯の轉識論に、
(卅七)

如此識轉不離兩義

一能分別二所分別

所分別既無能分別亦無

無境可取識不得生

以是義故唯識義得成
(卅八)

とあるに相通するであらうし、又玄奘譯の是諸識轉變、分別所分別等にも相似するであらう。併

しこの場合には、固より漢譯を、是の諸の識の轉變は分別なり。所分別の此に由れる彼れは皆なし。

故に一切唯識のみなりと訓まなくてはならない。
(卅九)

(卅一) 分量決、釋名決疑門、松室私記卷上、四左

(卅二) 兒島上綱、眞興(一條帝、關白道長の頃、一六六四寂)は、又興福寺勸善院に住んでゐた。松室の仲算の門人である。學徳高く、一代の師表となる。その二明の述作は今に多く傳はる(法隆寺探題、三類境私記二十右參照)

(卅三) 荻原博士譯、安慧の唯識三十頌の釋四三頁

(卅四) 同譯、四一六頁

(卅五) 印度哲學史(四〇一頁)の著者は、漢譯に存して支那日本で古來一般に用ひられる成唯識論に譯出せられてゐる唯識三十頌は確かに原意を得たものでなく、殊更に新說に依て譯出解釋せられたものである。或はたとひ然らずとするも、後世の成唯識論の考で以て古いものを解釋するのは研究上明に誤であると云つてゐる。

(卅六) これは恩師、山口益教授が、殊に私のためにものとされた和譯である。茲に識して、以て謝意を表さざる次第である。

(卅七) 大正三一、六二

(卅八) 道陳手書、轉識唯識三十頌二譯合本(延寶六年二三三八寫、東大寺圖書館藏)五右參照

(卅九) 印度哲學研究第六(四五三頁)云、この識の轉變が分別であると譯するのが自然であらうと信ぜらるゝ云々

凡そ轉變とは、變異、變現の意味とされる(安慧說)。識自體が變異して、或は變現して、所執の見相二分に似て現する。所執の二分は實有ではない。無が有に似る。無なる所執が依他の有に似て現するのである。故にかゝる意味に於ては、識轉變は論理的な意味に於て、同時に妄分別を表してゐる。轉變とは、變異、變現の意味に於て、又虚妄なる分別に外ならない。故に又安慧の三十頌の釋には、上所説の三種の識の轉變はこれ分別なり。三界の心々所は、境相を増益するを以て、分別と説かれると云ひ、又中邊分別論の安慧註には、……三界の……心々所は差別なくして云はゞ、虚

妄分別なり。差別しては所取能取なり。その中、所取としての分別は、外境と及び衆生として顯現せる識なり。能取としての分別は、我と及び了識としての顯現なりと云つてゐる。故にかゝる意味に於ては、識轉變は明かに妄分別に外ならない。^(四十二)然るに唯識論に依れば、識轉變を妄分別とするこ

とは、唯に安慧のみではなく、難陀も亦許すのである。なるほど轉變するところの識は、安慧に於ては識自體分、難陀に於ては内識見分であり、又轉變されたものは、安慧に於ては所執の二分、難陀に於ては我法の外境を表し、かゝる點に於て兩者は、夫々同じではないにしても、併し轉變すること、そのことは、難陀に於ても亦安慧と同じやうに、同時に妄分別することであつて、此の點では變りはない。故に唯識論には難陀の釋を擧げて、此の能轉變を分別と名く。虛妄分別を以て自性となすが故に論じてゐる。それ故に以上の如く考ふれば、轉變すると云ふは、直ちに妄分別することの意味するであらう。然るに又轉變は、改轉、變爲の意味ともされる^(護法說)。識體は改轉して、又或は變爲して、別に見相二分となる。二分は所執ではなく依他である。二分に於て執せられた實我實法のみが無である。有が無に似る。依他の相見二分が所執の所取能取に似るのである。故にかゝる意味に於ては、識轉變は、識體が轉じて依他の相見分となることであるから、轉變することは同時に——論理的な意味に於て——妄分別することではない。^(四十三)故に唯識論には又、或は識と相見とは等しく緣より生ずるを以て、俱に依他起なり。虛實なること識の如しと云ひ、^(四十四)又有義は一切

の心及び心所の熏習力に由て變ずる所の二分も、緣より生ずる故に依他起なり。遍計と云ふはこれに依て、妄て定めて實に、有なり無なり一なり異なり俱なり不俱なり等と執する。此の二を方に遍計所執と名くと論じてゐる。轉變とは、改轉、變爲の意味に於ては、直ちに妄分別を意味するとは云へない。凡そ轉變 *pariṇāma* と云へば *chang, transformation, transmutation, etc.* の意味、即ち變化、變態、變質等の意味であつて、固よりそれに依他の識自體が轉じて、又依他の見分相分となる改轉の意味がないではないが、併し又それと共に、依他の識體が轉じて、所執の能取所取となる變現の意味も亦あることは明かであり、而かもかくの如く轉變を變現の意味とする考へ方は、難陀、安慧共に認め、加之、慈恩はまた唯識疏に、(四十五)安慧已前の古德、皆二分はこれ計所執なりと説けりと云ふ點よりしても、寧ろ轉變を改轉の意味とするより、變現の意味とする考へ方のほうが、却つて印度に於ては、唯識説の傳統的な解釋とも考へられる。又或は西藏譯よりしても、梵文の第十七頌の讀み方が、改轉ではなく、變現の意味として讀む方が、寧ろ原文に忠實であるとせられ、又眞諦譯、轉識論よりしても、それが證明せられる點などよりして、やはり第十七頌に於ける轉變の意味は、その作者、世親に於ても、また變現の意味であると考へて差支はない。識は、世親に於ても亦、轉變することに依て、妄分別するのである。

(四十) 荻原博士譯本四三頁

(四十二) 山口教授譯による。

(四十二) 卷七、十九左

(四十三) 卷十、三十左

(四十四) 卷八、二八左

(四十五) 一本六二左

世親は三能變の相を説き已つて、是の諸の識の轉變は分別であると云ふ。固より安慧や護法の云ふやうに、識體が虚妄であり、無であるとは考へられない。識體は有であり、依他であるが、併しその識自體は轉變し、變現して、而かもその轉變し、變現することに於て、分別作用を起すのである。明かにこの場合、分別作用と云へば、妄分別であつて、假令、識自體は依他の有であるにしても、併しその作用としての妄分別は、有であり、依他であるとは云へない。虚妄なる分別は、所執の無なるものである。故に安慧は、識自體が轉變すること、變現すること、即ち妄分別すること、分別作用 更に言ひ換れば、見分を、識自體分と區別して、無なる所執とするのであるが、併し難陀は、かゝる見分を、體と用とは不離であるとする立場より、内識見分とするのである。内識見分はそれ自體は虚妄なるものではなく、有であるが、併しその作用は實ではなく、妄分別するのであるから、従つてかゝる虚妄な作用に依つて、變現された實我實法は、無であり所執でなくてはならな

い。思ふにかゝる考へ方は、獨り難陀のみではなく、又世親と同時代とされる親勝や火辨も亦、唱へてゐた説であるから、恐らく世親もかゝる考へ方を認めてゐたであらう。我々は次に攝論に依てそれを裏付けて見たいと思ふ。

(四十六) 唯識疏(一本十二右)に依れば、世親と同時代であつて、初めて三十頌の釋を著したことが知られ、又次下(六三右左)に依れば、難陀に同じく二分説であつたことが分る。又西明(燈一末三五右引)も親勝は二分説であるとし、又太賢の學記(中續八〇)にも、三藏の説として親勝は二分を立てたとある。

(四十七) 唯識疏(一本十二左)に依れば、火辨は世親と同時代であつて、而かも俗形の居士である。西明は二分説としてゐる。尤も義灯(四末二六右)に依れば、火辨は三分説の如くであるが、併し演秘(四末一〇左)に依れば、火辨は二分説であるとなしてゐるから、二分説としておく(同學抄四之六、三左)。

(四十八) 攝論の所知相分第三には、三相の唯識觀を明して、一唯識、二二性、三種種に由て唯識觀に悟入

すると云つてゐる。此の中、初めに唯識とは又唯量とも譯され、一切法はたゞ識のみであつて、その所識、即ち義、或は外塵と云ふやうなものは、つまり本識を離れて別に實有でないから、從つてかゝる意味に於て、唯識は成立すると云ふのである。これは世親に依つて無着の本文を考へたのであるが、無性の釋を見てもその意味に變りはない。次に二性とは相見二識であるが、而かもかゝる(五十)相見二識は、世親に依れば、一識に於て安立されるのである。即ちこの一識の一分が變異して相となり、第二分が見となると云ふ。無論相と見とは種々あつて、相は所取、見は能取であるが、併

し既に所取の義はあり得ない譯であるから、従つて能取もなく、かくて唯識觀に悟入すると云ふのである。無性の釋に依るも、意味するところに變りはないが、併し茲には、單に相見と云はず、更に分の字が加へられ、又見分は能取分、相分は所取分であつて、而してそれ等は不即不離であるとしてゐる。思ふにこれは無性が陳那の影響を受け、而して護法の先驅をなすことを反證するのであるが、併しそのことに就ては、後に改めて考へたいと思ふ。終りに種々とは、前に記したやうに、一識に於て變せられた相と見と、即ち所取と能取と、この二は各々多様なものである。例へば六識の如く、眼等の識は夫々眼等の自境を以て相となし、意識は通じて十八界の諸法を以て相とする。かくの如く種々の相と見とはある譯であるが、併し既に所取の義はないとすれば、能取の心も亦なく、従つて唯識觀は成立すると云ふのである。無性の釋に依るも亦これに同じい。凡そ右に於て三相の唯識觀は示されたであらう。今その第二の唯識觀に依れば、無着、世親に於ては、相と見とが認められてゐたことが解る。而してこの相と見とは、夫々所取と能取であつて、一識の義分であるから、別に體のあるものではない。別に體がないと云へば、一識の二用であつて、従つて自體と相と見とになると考へられないではないが、併しこの二性に依て、唯識觀は成立すると云ふ點より考ふれば、明かに二分說でなくてはならない。而して若し世親がかゝる立場にあるとすれば、又三十二頌の是諸識轉變の頌文に於ても、それは當然二分に於て解釋されねばならぬであらう。

(四十八) 玄奘譯、世親釋論卷四(大正三一、三三九)

笈多譯、卷四、差別章第二(大正三一、二八六)

眞諦譯、參五、差別章第二(大正三一、一八四)

(四十九) 今は唐譯に依る。梁、隋二譯は唯量と云ふ。

(五十) 大正三一、四〇一

(五十一)

又攝論の入所知相分第四にも、四尋思、四如實智を明してからその次に、その所觀の法を三種に分つて、一唯識性、二相見二性、三種々性としてゐる。初めに唯識性を觀するとは、一切法の名義自性差別は皆不可得のものであるから、従つてたゞあるは識性——識量——のみと觀するのである。(五十二)

(五十三)

以上は世親の釋に依て、無着の本文を考へたのであるが、やはり無性の釋もこれに變らない。次に相見二性を觀するとは、所緣の境は相であつて、能緣の識は見であるが、併しこの相と見とは、又

所取と能取であるから、従つて實にあるものではない。識が内と外との二義に似て顯現したのを、

(五十四)

見と云ひ、相と云ふに過ぎないと觀するのである。無性の釋を見るにその意味に變りはないが、併

し無性は更に茲に第二釋を設けて、又一識に於て、三相に似て顯現する。所取と能取と及び自證分

とである。かくの如き三相は、一識の義分であつて、非一非異であると云つてゐる。思ふにこの三

分説は、陳那の集量論にもある説であるから、無性は陳那の系統であることが知られる譯であるが、

併しこれはそれ故に、無着や世觀に見出されない新説とせねばならない。終りに種々性を觀すると

は、一識の顯現するとき、種々の相があるに似て生起するのであるが、併しかゝる種々相は、相もなく、生もないものであると觀するのである。^(五十五)無性の釋に依るも意味するところは同じい。凡そ以

上に於て三種の所觀の法は明らかにされたであらう。唯識論では、四尋思、四如實智は、唯識の五位の中、その第二加行位に於て、煥頂忍世第一法の四善根と共に說かれてゐるが、併し攝論では茲

に入資糧章に於て、三種の唯識觀と共に、八處の中の最終の三處として說かれてゐる。^(五十七)而して此の三種の唯識觀は、前に所知相分の差別章に說かれた三相の唯識觀にその儘に當嵌るのである。^(五十八)我々

は前の三相の唯識觀の中、その第二を考へることに依て、世親は無着と共に二分說であることを推定した。然るに茲に再び唯識觀は相見二性に依て成立すると云ふことが、繰返へされることを考ふ

れば、やはり世親が無着と共に二分說であることは、愈々その確率を増すであらう。加之、三十頌の

是諸識轉變の頌文が、是の諸の識は轉變して、分別たり所分別たり……と讀むよりも、寧ろ是の諸の識の轉變は分別なり。所分別は……と讀む方が、却つて原文に忠實であることを考ふれば、つま

り世親は二分說であるとして差支はない。故に中邊論には、二性(所取能取)に似て顯現せり。現に實の如くなるも、有には非ず。有と非有とを離るれば、これ義に於て無倒なるを知ると論じてゐる。

(五十一) 唐譯、卷六(大正三一、四一五)

隋譯、卷六、入應知勝相語第三(大正三一、二九六)

梁譯、卷七、釋應知入勝相第三、入資糧章第六(大正三一、二〇四)

(五十二) 眞諦譯では、これを唯量觀と云ふ。

(五十三) 同論第六(大正三一、四一五)

(五十四) 眞諦譯では、これを見相觀とある。

(五十五) 眞諦譯では、種々相貌觀とある。又

唐譯、種々性者、唯是一識顯現、似有種々相生、非速疾故、別々而現文

隋譯、唯是一識種々相生、非速疾故、次第而生文

梁譯、此二法由無始生死來數習故速疾、是故一時中、有種々相貌起文

普寂、攝論略疏第三(大正六八、一六二)云、明唯種々中、與隋唐譯頗異、隋譯云……唐譯云……諸譯各有道理、未知熟

正文

(五十六) 卷九、九右

(五十七) 唯識疏九末十三左參照

(五十八) 字井博士、印度哲學史三八一頁參照

(五十九) 同論卷下(大正三一、四七五)

(六十)

然るに太賢の學記に依れば、無着、世親が二分說であるとする相傳を謬なりとし、無着の金剛般若若論、及びその世親釋よりして、三分說であると云ふのである。金剛般若に、一切法は、星と翳と燈と幻と露と泡と夢と電と雲との如く、かくの如く觀すべしとあるを解釋して、星は見、翳は相、燈は識、幻は器、露は身、泡は受、夢は過去、電は現在、雲は未來に、夫々喻へるのであるから、(六十二)無着、世親は三分を立てるとするのである。然るにかくの如き譬喩は、又中邊論には虚空、畫師、(六十三)

幻師、火、燈、燈の六喻として擧げられ、又瑜伽論、攝論、唯識論等には、幻事、陽炎、所夢、影

像、光影、谷響、水月、變化の八喻として擧げられるのであるが、併しこれ等の譬喩の説かれるの

は、虚妄の疑を除かむが爲（攝論）、又は二邊（増益損減）の分別を離れむがため（中邊論）に説かれる

ものであつて、決して特にそれは三分を説く爲ではない。而して又假令、金剛般若論に、相或は見或

は識と云ふにしても、併しそれが直ちに三分説の謂ゆる、相分見分及び自證分であるかどうか、恐く

は無着、世親の本意は、二分説であらうと思ふ。故に又太賢は、西明の説としては、無着、世親が二

分を立てゝゐたと云ひ、又文軌の因明疏にも、世親は二分説であるとなし、又善珠の分量決、及び

明燈抄にも、無着、世親は二分説であるとしてゐる。加之、世親と同時代とされる親勝や火辨も亦

二分説であつたことは、玄奘も慈恩も西明も共に認めてゐた點よりすれば、つまり二分説は、無着

世親の時代に於ては、一般の通説であつたとも考へられる。併し固より相見二識は、依他の本識の

變異、顯現であるから、従つて此の本識を體となし、相見二識を用とすれば、無性の解釋するやう

に、三分説となるし、又相見二識は所取能取であつて、無であり所執であるとすれば、あるは唯自

體分のみとなつて、安慧のやうに一分説ともなるのであるが、併し既に相見二識が顯現されたとす

れば、此の外に更に別に、識なるものはあり得ない點よりすれば、やはり二分説の立てられるのは

當然であらう。故にかく考ふれば、世親の二分説は、明かに後世の三分説、或は一分説となるべき

可能性の孕むところの、二分説なることは言を俟ない。而してこの相見二識が依他ではなく、所執であることは、それが所取能取とされること、或は轉識論などに依るも明かであるが、併しそれは、^(七十三)兔に角、無着、殊に世親が二分説であることは、凡そ以上に於て示されたであらう。

(六十) 同書卷三(正續八〇套)

(六十一) 金剛般若論卷下(大正二五、八八四)

(六十二) 四分義私記卷上六右已下參照

(六十二) 玄奘譯(大正三一、四七六)

(六十四) 同論卷三六(大正三〇、四九〇)、又卷七四(大正三〇、七〇六)

(六十五) 同論卷五—玄奘譯(大正三一、三四四)、樞要下未三二左已下世親、無性を對照して委釋。

(六十六) 同論卷八、三一左

(六十七) 因明大疏抄第三九(大正六八、七六四)引

(六十八) 同書、釋名決疑門

(六十九) 同抄、六末(大正六八、四二五)

(七十) 太賢學記第一(前引)に依る。

(七十一) 唯疏識一本六三左

(七十二) 義燈一末三五右參照

(七十三) 又は印度哲學史三七五頁參照

次に親光の佛地論に依れば、陳那の集量論には、心々法に皆三分ありとして、一所取分二能取分三自證分の三分を説くとしてゐる。西藏譯にのみ傳はるところの集量論は、世親の因明説を大成して、謂ゆる新因明を建設し、以て印度の論理學に革命を來した著書であるが、此の中の一頌は又唯識論の中にも引用されてゐる。最近の學者の説に依れば、陳那は世親の滅後、間もなく出生したとせられる。既に陳那は因明の方面でも、新しい説を提唱し、例へば因の三相の如き、或は聖言量の廢止の如き、何れも彼の新説であつて、従つてこの點より考ふるも、又彼は内明の方面で、新しい説を立て、或は二分を三分に發展せしめたとしても當然であらう。唯識論に依れば集量論の頌文が引用せられ、

境に似たる相は所量なり

よく相を取ると自證とは

即ち能量と及ひ果となり

此三は體別なることなし

とある。(五)唯識疏に依ると、相は所量、見は能量、自證は量果であつて、此の三は體は一であるが、

併しその功能は別であるから、説いて三とすると釋してゐる。故に古來相傳して、かゝる三分を相分見分及び自證分とするのであるが、併し佛地論に依れば、陳那は所取分能取分及び自證分の三分

を立てるとなし、又既に記したやうに、無性も所取能取及び自證分の三分を認めるのである。或は直ちに相分は所取分、見分は能取分に同じいと考へられないではないが、併しかくの如く考ふれば無性は兎に角、護法の門人なる親光が、何故に陳那の説を擧ぐるに、相分見分とは云はず、特に所取分能取分としたか理解されない。又無性にしても、彼は陳那以後の、而かも陳那の系統の人なることは、その攝論釋の中に、陳那の掌中論の第一頌が引用されることに依つて知られるが、而かも彼が相分見分とは云はず、所取分能取分としたことなどより考ふれば、やはり陳那は、相分見分及び自證分の三分ではなく、寧ろ所取分能取分及び自證分の三分を立てゝゐたとすべきであらう。

(一) 同論卷三(大正二六、三〇三)

(二) 同論卷二、二七左

(三) 慈恩因明疏二、六

(四) 同疏六、九

(五) 三本四八左

(六) 明證導註、又松室私記上、十三左

(七) 無性釋論卷六(前引)

(八) 卷六(大正三一、四一五)

(九) 義淨譯(大正三一、八八四)

さて此の所取分能取分の所取能取に就て、^(十)瑜伽論では、五種遍計所執自性を説く中、その第一遍

計義自性を更に四種に分け、その第三と第四とに、夫々遍計所取相、遍計能取相を説いてゐる。又
(十一) 分別瑜伽論(分別觀論)の彌勒教授の頌には、

かくの如く内心に住して

所取は有るに非すと知る

次に能取も亦無なりとし

後に無所得に觸するなり

とある。固より此の頌は唯識論に依れば、加行位の四善根の中、第三忍位に於て、下忍では所取

無、中上忍では能取無と知り、次に世第一法の一刹那を経て、後に見道に入り、無所得に觸れるこ

とを表してゐる。(十二) 而して此の一頌は、又攝論の入所知相分、及び阿毘達磨集論にも引用されてゐる(十四)

が、併しそれは兎に角、これによれば、所取能取は有でなく、無でなければならぬ。それ故に世

親はまた攝論釋に、所取の義は實に所有なし。能取も亦かくの如くにして成することは出來ぬ(十五) 眞諦

(譯) と論じてゐる。又莊嚴論の眞實品に、五位の道を明す中、その第二位に、

已に義類の性を知れば

善くたゞ心光に住する

法界を現見するか故に

二の相を解脱するなり

とある。長行釋に依れば、茲に二の相と云ふは、所執能執であるが、つまりこの位に入り唯識觀をすれば、法界が現見されて、所執能執の二の相を遠離すると云ふのである。又この頌文は攝論に引用せられ、而して所執能執の二相は、唐譯隋譯及び梁譯共に、所取能取の二相と譯されてゐる。して見ると所取能取はやはり無であり、執であつて、遠離すべきものでなくてはならない。又中邊論の彌勒の本頌には、

虛妄分別はあり

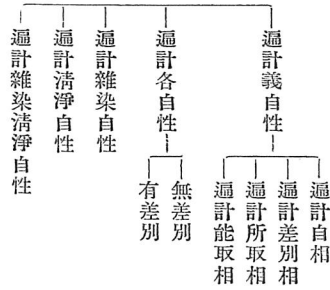
此れかうへには

二つ都て無なり

とある。長行釋に依れば二とは所取能取であるから、明かにこれに依るも、二取は無でなくてはならない。凡そ以上に於て、無着世親に於て、所取と能取が如何なる意味に於て考へられてゐたか示されたであらう。所取能取は無所得であり、それ故にこれを離れることに於て、初めて眞の唯識性に住することが出来るのである。安慧も亦この考へ方に同じい。彼は中邊論の彌勒の本頌を注釋して云ふ。二は所取及び能取なりと云ふは、その中所取は色等なり。能取は眼識等なり。所取と能取との體よりの離性、離性は虛妄分別の空性なれども、而も虛妄分別の無なるには非すと釋し、又三十

頌の釋には、所取あれば能取あり、併ら所取なきときに、能取はあらざる故に、所取なきことに由て、能取のなきことも了せらる。……かくの如く平等々々して自の心の法性に住するなりと云つてゐる。故に以上の如く考ふれば、二取は無であり、虛妄なるものであつて、これを遠離するときに、初めて眞の唯識觀に悟入することが出來ると云はねばならない。

(十) 卷七三(大正三〇、七〇三)



(十一) 唯識論卷九、十一右引

(十二) 唯識疏九未六三右參照

(十三) 卷六(大正三一、三五三)、世親釋論、玄奘譯

(十四) 卷六(大正三一、六八七)

(十五) (大正三一、二二)

唯識心分説の發達過程

(十六) 卷二(大正三一、五九九)

(十七) 玄奘譯、世親攝論卷六(大正三一、三五三)

(十八) 唯識論卷七、二二右引

(十九) 山口教授譯、安慧、中邊分別註釋に依る。

(二十) 荻原博士譯本五六頁

(廿一) 次に唯識論に依れば、第二十八頌、即ち若時於所緣の一頌を廣釋するに就て、正體智に相見二分

があるかどうかを論じて、三の異説を擧げてゐる。即ちその第一説は、正智には二分俱無と云ふ説、

次に第二説は、相見俱有とする説、終りに第三説は、見有相無とする説である。初に第一説、即ち

二分俱無の説は、唯識疏に依れば、莊嚴論や攝論の二取の無に同じいものであつて、識體が冥然と

して眞如に合するときは、所取はなく、また能取もないから、二分は俱無であるとするのである。

して見るとかゝる二分は、前に考察した所の、無着世親乃至安慧等の意味する所取能取となるであら

う。次に第二説は二分俱有の説である。凡そ縁すると云ふは、所縁の相を帶して起ることである。

假令、正智が眞如を縁する場合にしても、正智には眞如に極めて相似する相分がなくてはならない。

又見分にしても、若しそれがなければ、縁することも亦あり得ないであらう。かくて第二説に於て

は、二分俱有とするのであるが、思ふにこれは、佛地論の三説ではその第二師の説に當るであらう。

終りに第三説は相無見有の説である。正智が眞如を證する場合、その眞如の相分を生じ、これを縁

するのではない。その眞如の體相を挾帶して起るのである。故にかく考ふれば、相分はなく、見分はあることゝなるが、思ふにこれは佛地論の三師では、その第一師と第三師とに通ずるであらう。

凡そ以上に於て、根本智に、相見二分があるかどうかにかつて、三の異説は示されたのであるが、此の中で後の二説は、相分は兎に角、見分は何れにしても有るとされる。して見ると、かゝる二分は直ちに無とせられ否定さるべき所取能取ではない。故に唯識疏には、二取と云ふは二取が取を顯す。^(廿六)即ち二取を二取と名くるには非ず。……又相分等は必ずしも伏すべきものには非ずと述してゐる。

(廿一) 卷九、十二右

(廿二) 九末七四右

(廿三) 學抄九之四、二分俱無師條下參照

(廿四) 卷三(大正二六、三〇三)

(廿五) 演秘(七本五五右)に依れば、佛地論の第二師は唯識論の第三説に當るとするが、併しそれは後得智のみに限られた場合である。若しその次下に、或は本疏(九末七四右)にも云ふやうに、この佛地論の第二師は、正智と後智とを含むと考ふればやはりそれは、正智では唯識論の第二説、後智では唯識論の第三説に當るとせねばならない(法隆寺の先師に依る)。因に卷九、十二右の二分有無に關する旭雅本の冠註「この表は、右の如く考ふれば、誤である。

(廿六) 九末二九右

(廿七)

又唯識論に依れば、相見道を明した次に、後得智に二分があるかどうかを論じて、三の異説を擧げてゐる。即ちその第一説は後智に二分俱無と云ふ説、次に第二説は相無見有とする説、終りに第

三説は二分俱有と云ふ説である。初に二分俱無の説は、^(廿八)唯識疏に依れば、佛不説法家と同じ系統の説であるが、併しまた之は正智に二分俱無とする説と同一と見て差支はない。故に明詮の導註にはこれを安慧師の義としてゐる。次に第二説は相無見有の説である。後智には分別があると云ふ點に於て見分はあり、聖智は省よく境を照すと云ふ點に於て相分はあり得ないとする。思ふにこれは佛地論ではその第一師に當る。終りに第三の相見俱有の説とは、後智に於ては、眞如の相を思惟すると云ふ點よりして、見分はあり、又似の相を思惟して眞實の眞如の相を見ないと云ふ點に於て、相分がなくてはならないとする。思ふにこれは、佛地論では第二師及び第三師に相當するのであるが、而も又前の正智の場合の第三説と共に、正義とされることを考ふれば、何れも護法説と見て差支はない。而して此の唯識論の第一説は、前の正智の場合の第一説と共に、何れも安惠の説とされる點よりすれば、この二説を合して一師の説と見做してもよいであらう。又佛地論の第三師は、唯識論の正義説と、正智後智共に相等的いから、これは護法説と見てよく、従つて唯識論と佛地論とに説かれる諸説の中で、以上の如き共通な諸説を省けば、つまり残るものは三説となつて、それ故に二論の全體を綜合して表示すれば、左の如くなるであらう。

		見 分	相 分		唯 識 論	佛 地 論
根	後			a	1	
根	後			b	2	
根	後			c	3	3
根	後			d		2
根	後			e		1

凡そ以上に於て、聖智、即ち本後二智に二分があるかどうか、明かにされたであらう。凡そ安慧等の如く、相見二分を無であり所執であるとするれば、それは直ちに所取能取であつて、それを遠離するときに、初めて眞の唯識觀に悟入することが出来る。併し護法等の如く、相見二分を有であり依地であるとするれば、聖智に於て相分は有無不定にしても、見分は有であり依他であるから、從つて二分は直ちに無なる所取能取であるとは云へない。故に唯識論には、二取を離るゝことを論じて、それは見相二分を否定することではなく、たゞ種々の戲論の相(所取の相)を取らない(無能取執)ことであるとしてゐる。^(三十)

(廿七) 卷九、十五左

(廿八) 九未八六左

(廿九) 卷九、十二右

(三十) 戒定、唯識論獨斷十二、能取所取二分條下參照

では陳那の所取分能取分とは如何なるものであらうか。既に所取能取ではなく、所取分 *grāhya* *bhāga* 能取分 *grāhaka bhāga* と云ひ、分の字が加へられてゐる。分の字がある限り、それが直ちに所取能取に同じいとは云へない。凡そ分 *bhāga* とは *share, portion* の意味であつて、全體に於ける部分の意味を表す。取らるべき、認めらるべき、執せらるべき部分を所取分とし、又それを取るところの、認めるところの、執するところの部分を能取分とすれば、假令執せられ、取られたものは無であり、所執であるにしても、併し執せらるべき、取らるべきもの、或は執するところの、取るところのものが無であり、所執であるとは云へない。部分とは全體の部分である。つまり部分が全體の一部分、即ち取らるべき部分、或は取るところの部分としてある限り、若し所取と能取とを綜合した全體が有であれば、従つてその一部分の所取分、能取分も亦無であると云へない。明かに彌勒の本頌に於ては、虛妄分別は有とされる。して見れば所取分能取分も亦有でなくてはならない。^(廿一) 陳那の觀所緣論に依れば、假令色等の極微は五識の所詮となつて、緣の意味はあるにしても、併し五識に極微に似る相はないから、所緣となることは出来ない譯であつて、従つて極微等に所緣々の意味はあり得ないと云つてゐる。思ふにこれは、所緣々となるものは、内識の似現の外にあり得な

いことを定立せむが爲に、先づ極微を否定したものであるが、して見ると陳那に於る所縁々は内識の似現でなくてはならぬ。彼が所縁々を規定して、能縁の識が自の相を帶して起り、而も實に體あるものとするは、これを表すものであらう。有體なる内識の似現が即ち所縁々である。思ふにこれは唯識疏に、所縁々と云ふは、有體法の己が相を帶せるものであつて、而かも心々所の所慮所託となるやうなものとするに同じい譯であるが、して見ると、陳那に於ては、相分の如きは實に無でなく、有體のものでなくてはならない。又陳那の理門論に依れば、此(現量)の中に於て、別に量果があるのではない。此の現量の體が義(境)に似て生じ、又用あるに似るのであると論じてゐる。定賓は理門疏にこれを註して、體なる自證分に於て、相分が(所量の)義に似て變現し、又見分が(能量の)用あるに似て生ずるから、それで相見二分を離れて別に、量果としての自證分はあり得ないことを意味すると釋してゐる。して見ると體に就て云へば、所量能量及び量果は別々ではなく一體のものではあるが、併し用に就て云へば、轉變し差別して決して一のものではない。所量と能量と所取分と能取分と、それは自證分と異り夫々實有であると見て差支はない。故に慈恩は因明疏に、自證分を量となし、見分を量となし、或は相分を量となす。皆能量に離れざるが故と云つて、三分を皆等しく量としてゐる。加之、前の觀所縁論の極微等の文は佛地論に引かれ、第三師の後得智に見相二分のあることを證明するに、用ひられてゐることを考ふれば、陳那は先づ二分を有とし、而

かにもかゝる二分は後得智に於て、共に認められてゐたとせねばならない。又唯識疏に依れば、正體智の二分俱有を證明するに、觀所緣論の帶彼相起故の文を引用してゐる。して見ると陳那に於ては後得智のみではなく、又正體智にも二分俱有の説を立てるのである。總じて云へば陳那に於ては、有漏心のみではなく、又一切の無漏心に通じて、二分俱有とされてゐた譯であつて、従つてこれは佛地論の三師では、その第二師、即ち二智を通じて二分俱有とする師の中に含まれてゐると見て差支はない。つまり陳那の所取分能取分は有であり、而してそれは一切の有無漏に通じて認められてゐたのである。

(卅一) 大正三一、八八八

(卅二) 七末七〇左

(卅三) 大正三二、八

(卅四) 明燈抄六末(大正六八、四二七)引、又大疏抄卷三九(大正六八、七六四)引

(卅五) 卷下(大正四四、一四〇)

(卅六) 卷三(前引)

(卅七) 同疏九末七四左七

凡そ以上に於て、陳那の所取分能取分は如何なるものであるか、それは示されたであらう。固より所取分能取分は、作用であり一識の義分であるから、その所依の體がなくてはならぬ。體なくし

て用はない。體があつて初めて用はあり得るのである。二分とは、云はゞことさらに分けられた二の部分であるが、ではこの一分と他の一分との統一は、何處に見出さるべきであらうか。二分の所依、二分の顯現以前の當體、それは何處に見出さるべきであらうか。固より二分を安慧のやうに無なる所取能取とすれば、明かにそれは遠離すべきものとして否定される。所取の殻と能取の殻とを脱ぎ棄て、初めて眞の唯識性は顯れるのである。それ故にこの考へ方よりすれば、あるのは唯自體分のみとなるであらう。^(卅八)中邊論にも云ふやうに、虛妄分別は有るのである。併し既に虛妄分別があるとなれば、分別することがあり、而もその分別すると云ふことは、又同時に轉變することでもあるから、従つてそこには所取能取の顯現がなくてはならない。併し既に茲に二分が變現されてゐるとすれば、更にこの二分の外に、別に分別するものも亦分別されるものもあり得ない。故にかく考ふれば、二分の所依は直ちに二分そのものに於て追究せられ、二分の外に更に別に自體分の如きものが、定立される要はない。^(卅九)攝論にもあるやうに、二性に由て唯識觀に悟入することが出来るのである。併し既に二分は用である。用は決して體ではない。假令體と用とは不離であるにしても、併し用に體はなく、體を求めることは出来ない。故にかく考ふれば、當然二分の外に、別に自體分が定立される譯であるが、併し自體分と二分とは、能量所量及び量果に於けるが如く、體を離れて用はなく、その體とは非異でなくてはならない。^(四十)集量論にも云ふやうに、此の三は體別なることなしであ

る。無論、能量所量及び量果の關係は、かくの如く三分に當嵌るのみではなく、又二分乃至一分に依つて考へられるのであるが、併しそれは兎に角、二分の外に更に自證分がなくてはならぬことは、凡そ右に於て示されたであらう。陳那に於ては、所取分能取分及び自證分が認められてゐたのである。

(三十八) 彌勒本頌(前引)

(三十九) 卷四(前引)

(四十) 佛地論(前引)引

(四十二) このことは、後に能所量果を考へるときに、更に委しく記したいと思ふ。

かくて陳那に於ては、所取分能取分及び自證分の三分が立てられるのであるが、而もこの三分説は、無着世親に於ては見出されない説である。而して又陳那は、佛地論の第二師の如く、一切の有無漏を通じて二分俱有の説を立てたとすれば、今これを無着世親等にあつては、二分は無であり所執であるとするに比較對照するとき、更に斬新な説でなくてはならない。陳那は世親の直後、即ち四〇〇——四八〇頃に在世したのであるが、彼は既に古因明に對して新因明を組織した程の人であるから、唯識に於てかゝる新しい説を立てたとしても、或は當然かも知れない。前にも記したやうに、無着世親の二分説は、一分説或は三分説となるべき可能性を、多分に含む譯であるから、若し一分説の方向に進んでいけば安慧となり、二分説の方向に發展すれば難陀となり、而して三分説の

方向に徹底すれば陳那となるであらう。併しそれは兎に角、陳那が三分説であつたことは、多くの
(四十二)
論及び疏に記されるから肯綮に價してゐる。かくして恐らく三分説は初めて陳那の定立したもので

あるが、而かもそれが又無性に依て認められてゐたことは、彼の攝論釋に依て知られる。彼も亦陳
(四十三)

那のやうに一識の上に、所取能取及び自證分の三分を認めてゐるが、併しその三分が陳那の三分と同
一であるかどうか、そのことは現在の私として知る由もない。前記のやうに無性は陳那の掌中論の

第一頌を、攝論釋に引用してゐることよりして、陳那以後の、而も陳那の系統の論師であることが知
られる。
(四十四)

最近の學者の説に依れば、彼の在世年代は、四五〇——五三〇頃の約八十年であつて、從て
難陀とその在世を同じくし、安慧よりは約二十年の先輩であり、而して護法の出生直前になくなつ
てゐる。して見ると、無性は又陳那とも約三十年間、その在世年代を同じくしてゐた譯であるから、

この點よりすれば、彼は或は直接に陳那の思想の影響を受けてゐたとも考へられる。併しそれは兎
(四十五)

に角、彼も亦陳那の如く三分説であつたことは、文軌の因明疏にも記されてゐるのである。又唯識
(四十七)

疏に依れば、護法は四分説であると共に、又三分説を用ひてゐたことが解る。即ち四分説は護法正
義であるが、併し護法別義としては又三分説も用ひられてゐたのである。護法に於て三分の中、有

漏心は兎に角、無漏心は根本智では相無見有、後得智では相見俱有であるから、前にも記したやう
に、若し陳那が二智を通じて相見俱有であるとすれば、陳那と護法と共に、等しく三分を立てるに

しても、併しその意味内容まで全く同一であるとは云へない。併しそれは兎に角、以上の如く考ふれば、凡そ心分説に於ては、無着、世親、親勝等の時代には二分説であつたに對し、陳那、無性、護法等に依つて新しく三分説の系統が定立せられ、傳承されたことは明かであらう。(未完)

(四十二) 唯識論卷二、二七左

佛地論卷三(大正三六、三〇三)

唯識疏一本六三左

同上疏三本四八右

因明疏卷下(前引)

了義燈一未十左

唯識學記卷一(前引)

同上卷三

分量決、釋名決疑門

明燈抄(大正六八、四二五)

(四十三) 卷六(大正三一、四一五)

(四十四) 印度哲學研究第五、一四七頁、印度哲學史四三四頁

(四十五) 大疏抄(大正六八、七六四)引

(四十六) 一本六二左、又七未二左、又十未七九左

(四十七) 太賢學記卷一(前引)

(八、十一、聖日、於法隆寺勸學院稿了)